

第 51 回 熊野信仰と袋井 15 海の熊野と袋井

ここからは、浅羽地区西ヶ崎の鎮守社の紹介に移るが、最初に混乱しないよう基本となる事柄を整理しておこう。

西ヶ崎は海岸平野の低地帯に松山・梅山・松原・初越と東西に延びる砂州上に営まれた東浅羽地区各集落の西端に位置することから、西ヶ崎村と名付けられたが、村が拓かれた江戸初期より、西浅羽地区に含まれている。その理由を考えてみると、村を拓くにあたり、西浅羽地区の鳥羽野村（富里）の人々が拓いたという伝承と、当時、村東を原野谷川支流が流れ、地形的に隣村の松原村・初越村と分離していたからだと考えられ、鳥羽野同様に熊野信仰が盛んな村であった。

村の鎮守社は現在「明之宮神社」という名称で登録されているが、これは昭和初期に新しく申請したもので、本殿内の棟札や古記録を確認すると、現在は社殿が一棟だけになってしまったが、ここには「(西ヶ崎) 熊野三所権現」と「牛頭天王」「明之宮稻荷」の3社が存在することが判明し、中心は熊野社であった。このように神仏分離が行われた明治初期や昭和初期から戦後には、神社名を新しくすることや祭神の変更すらごく普通に行われている。

このうち熊野三所権現には、御神体（本地仏・ほんじぶつ）として阿弥陀如来・薬師如来・十一面観音の三尊像が、明治初期の廃仏毀釈の難を奇跡的に逃れ、今も現存している。（山）

第 52 回 熊野信仰と袋井 16 海の熊野と袋井

現在「明之宮神社」と呼んでいる西ヶ崎村の鎮守は、かつて熊野三所権現社であり、同じ境内には牛頭天王社(祇園)と明之宮稲荷の祠が摂社として存在していたことが、浅羽町史編纂時の資料調査によって判明した。神社名が明之宮神社に変わったのは、本来脇役の明之宮稲荷が主役になったということで、こうした事例は意外と多い。有名なのが「豊川稲荷」だ。円福山豊川閣妙巖寺(えんぷくざん とよかわかく みょうごんじ)という曹洞宗の寺院で、その鎮守の稲荷社の方が有名となり、寺名は知らなくても、「豊川稲荷」で通ってしまっている。

西ヶ崎熊野三所権現には御神体にあたる本地仏(ほんじぶつ)が残されており、「廃仏毀釈を逃れてよく残ってくれていたなあ」という驚きが調査時の実感として残っている。三軀のうち主尊が中央の阿弥陀如来像で熊野本宮の祭神、向かって右側が薬師如来像で熊野新宮の祭神、左側が十一面観音像で那智の祭神を顕している。

ところが、この組み合わせには違和感がある。通常、那智山は千手観音で顕されるが、西ヶ崎では十一面観音で読み替えている。このシリーズを続けて読んでいる読者はおわかりだろうが、十一面観音は鳥羽野村鎮守の王子権現社の本地仏であり、中野白山社懸仏の観音の図像として用いられ、伊勢と熊野の神は同体であると主張する熊野若宮(伊勢神)の本地仏でもある。

太田川流域には伊勢神宮の御厨領が存在し伊勢信仰が広がる。原野谷川流域の熊野信仰と融合し、那智の観音を伊勢若宮の本地十一面観音として読み替えたのだろう。西ヶ崎の観音像は伊勢神でもあったわけだ。(山)

第 53 回 熊野信仰と袋井 17 海の熊野と袋井

原野谷川を遡り、ここからは西浅羽地区長溝村の熊野権現社を紹介しよう。実は長溝地先に「長溝十二所」という小字名の土地が存在している。十二所とはもちろん、熊野十二所権現を指すから、その場所には社が設けられ、かつて集落が存在したことを示しているのだろうか？

そこは原野谷川と蟹田川が合流する地点の三角形状に取り残された土地であった。県が原野谷川に対して大規模な改修工事を行うこととなり、河川敷内で埋蔵文化財の調査が必要になるか、不要かを判断するため、川の水位が下がる干潮時を狙い地面が露出している部分に土器が露出していないか丹念に歩き回り、その時に「長溝十二所」という場所があることを知った。平成 6 年冬のことだった。しかし、なぜ川の右岸(西側)に飛び地として浅羽町の長溝地籍が有るのだろうか？

現在の原野谷川と太田川の流路は徳川家康が征夷大將軍に任じられ江戸に幕府が設けられた慶長 8 年(1603)の翌年に、幕府の代官頭として遠江支配に関わっていた伊奈忠次(いなただつぐ)が奉行となり、川筋が悪く頻繁に洪水を起こす原野谷川の川筋を変え、太田川と合流させて遠州灘に直接排水できるよう、大規模工事が昼夜を問わず進められた結果できたもので、それ以前の長溝村中央部を貫いて掘られたことから、長溝地籍が新たな川筋によって分断され、この時に集落も鎮守十二所権現も現在の長溝地区に移転したようだ。(山)

第 54 回 熊野信仰と袋井 18 海の熊野と袋井

長溝地区の鎮守を読者の方はお存じだろうか?この問いかけに地区の方は「桑原神社」と答える。しかし、戦前は「郷社八幡宮(ごうしゃはちまんぐう)」として登録されていた。

「八幡神は桑原神と同じなの?」答えは全く別の神社で長溝村の開発史に関係するようだ。現在の原野谷川流路にあった旧村は、410 年前の川筋付け替え工事に伴って東側に移転し、現在の長溝地区を形成する。このとき北信濃の大町辺りから移住してきた氏神に若宮八幡宮を祀る仁科一門、それと、信州伊那谷から移住してきた氏神に産土神(うぶすなかみ)の桑原大明神を祀る桑原一門の両者が協力して現在の長溝地区を開拓し、新たに「長溝村」を築いた。このため、村の鎮守は若宮八幡宮と桑原神社の二社からなっていたわけだ。

浅羽町史編纂に伴う資料調査で本殿内から承応二年(1653)から明治十四年(1881)までの 7 枚の棟札を確認し、その記載内容の変化から最初は 2 棟の社殿が別々に建っていたが、これでは建替にお金がかかるので、明和二年(1765)に現在のように統合して一つの本殿内に 2 社が同居する形となり、現在に至ったことが明らかとなった。

本殿裏の境内社(けいだいしゃ)には長溝十二所から移された(熊野)十二所権現、稲荷大明神、天縛(白)神宮の三社がひっそりと祀られている。この中で長溝地区のルーツに関わるのは熊野十二所権現であるが、それを伝える語り手や子孫は、今は一人もいない。(山)

第 55 回 熊野信仰と袋井 19 海の熊野と袋井

長溝地区から原野谷川に沿って遡ると、諸井という地区に出る。ここは旧浅羽町で最も北端に位置する地区で東側に小笠山段丘の末端が迫り、西側には原野谷川と小笠沢川が迫る狭間に位置し、たくさん（諸）の水（井）が集まるところから、付けられた地名と言えるだろう。

江戸時代には上諸井村、下諸井村の二ヶ村から成り立っていた。下諸井村の鎮守は現在 八雲神社と称しているが、これは明治初期の神仏分離令で、仏教名称を禁じたために変更したもので、それ以前は「四天王社(してんのうしゃ)」という名称で、祇園社であった。祇園は祭神が牛頭天王(ごずてんのう)というインドの土着神が後に仏教の守護神となったもので、強力な厄払いの力を持つ。四天王の天王はここに由来する。

上諸井村の鎮守は、現在、王子神社と言い、やはりこちらも明治初期の神仏分離令で変更したもので、それ以前は「王子権現社(おうじごんげんしゃ)」という熊野三所権現の御子神 若一王子権現(にやくいちおうじごんげん)を祀る社だった。これまで読んできた読者は、「ああ、富里地区の王子神社と同じだ。」と気づいてくれるだろう。諸井地区も原野谷川流域に展開した「海の熊野」に通じる要所の一つであったから、村の鎮守は熊野一色と言いたいところだが、下諸井村は祇園という、川の祓い神を祭神に選んでいるから、熊野神は無いと思っていた。

ところが、大規模な住宅地の建設計画が持ち上がり、曹洞宗心宗院(しんそういん)の廻りを発掘することになり、この寺院の範囲だけがなぜか「字十二所」と地名に残っていた。十二所とは熊野三所権現を始め、御子神などの総称だ。するとここはもと、熊野社があった場所なのだろうか。(山)

第 56 回 熊野信仰と袋井 20 海の熊野と袋井

諸井に所在する心宗院は戦国時代の終わりに、武士(駿河伊達氏・諸井氏という説がある)の館(やかた)であったものを、心宗庵という庵(いおり)に改め、江戸時代初期に可睡斎末の曹洞宗寺院にしたとされている。

境内内外の発掘調査により、寺院の廻りを取り囲んでいる土塁は、鎌倉時代(13 世紀)に成立した館の廻りに巡らされたものを基礎にして、補修や改修を経て今も残っていることが判明した。

ところが、その下層からは平安時代後期の役所で使われるような方形木組みで底一面に礫を敷き詰めた井戸や立派な建物跡数棟が見つかり、渥美産の瓦塔(がとう)というミニチュアの塔の破片も出土した。瓦塔は非常に珍しく、県内からは数点しか見つかっていない。これは一般に仏堂の中に祀られた礼拝用で、中には舍利(しゃり)容器を納めたり、ミニ礼拝仏を祀るたりすることがあったようだ。すると、ここには当時、寺社という宗教施設が存在したことになる。

そこで浮かんでくるのが、この場所の位置だ。諸井は平安時代後期には山名荘(やまのしょう)という、遠江で最初に置かれた熊野山領の南端に所在した諸井郷にあたり、目の前は大宇(おおあざ)浅羽で、摂関家領の浅羽荘が拡がり、両荘園の境目にあたっている。すると、山名荘の境の鎮守となる熊野権現が置かれても不思議ではない。そんな推測を巡らしていたが、これを裏付ける資料が調査では出土することはなかった。(山)

第 57 回 熊野信仰と袋井 21 海の熊野と袋井

浅羽町史編纂に伴う寺社の悉皆調査で、旧下諸井村の鎮守 八雲神社を調査し、そこで熊野神を発見した。55 回で紹介したように、明治以前は四天王社という名前で祇園の神である牛頭天王(ごずてんのう)を祭神として祀る、夏の祓いの神社であった。

ところが、神社の覆屋内には同じような規模の祠が二基並んで祀られている。一つは祇園社としても、同格に祀られるもう一つの祠の祭神は果たして何だろう。

宮司さん総代さん立ち会いで、本殿扉を開けると、向かって右側が祇園社、左側がなんと、熊野十二所権現だった。やはり、下諸井村の鎮守は熊野の神々であったわけだ。それを明治初期の「一村一社統合令」により、村内各所に祀られた祠の多くを村鎮守の境内に集め一括管理するという、政府の宗教政策に従った結果だった。

本殿内の棟札を探し銘文を確認すると「奉造立拾二所権現御棟札氏子繁昌祈所啓白 元禄拾四年辛巳曆 〇月吉祥日」と記されているのを確認した。これは元禄 14 年(1701)に熊野十二所権現の祠を、新たに造立しなおした時のものだ。

ところが、これ以外に青銅でできた仏像の残片一躯がみつかった。これを見た瞬間「出てくるべきものがようやくおでましになったか……」と。それは両手の部品と土台となる円盤が無くなった、鎌倉時代の懸仏だった。像高 14.2 センチの本格的な彫りのしっかりした像で、手の部分が無いので確定できないが、熊野三所権現の一つ、那智山の祭神を顕す千手観音座像と考えられる。この十二所権現が明治初期まで祀られていたのが、字十二所の地名が付けられた心宗院の境内だったわけだ。(山)

第 58 回 熊野信仰と袋井 22 海の熊野と袋井

海の熊野と袋井をテーマに連載してきたこの企画は、東海道の街道に面した木原集落の木原権現と長命寺がどのようにしてできたのかを考えて締めくくりとなる。では、最後の山場にとりかかろう。

木原の村鎮守は、現在、許祢神社(こねじんじゃ)という名称を付けた神社だ。しかし、この名称は明治初期の神仏分離政策に伴い新たに名乗ったもので、それ以前は熊野権現の若宮を祭神とする「木原権現」が正式名称であり、神と仏とが融合した「権現」という尊格を祀る、赤尾山長楽寺(現在の赤尾洪垂神社で明治初期の神仏分離で寺院を廃し、神社とした)の真言僧と村に居住する神職の木原氏が共に祭祀を執り行う平安時代後期(12 世紀か)に成立したお宮だった。

この変更は、仏教色を排除しないと、神社として存続が許されなかったことからとられた措置で、延喜 5 年(927)にまとめられた『延喜式神名帳(えんぎしきじんみょうちょう)』に記載された山名郡の官社「許祢神社」が、その所在が確定していないことを巧みに利用して名乗ったことに始まる。

この木原権現に隣接して西側には、曹洞宗寺院の那智山長命寺が所在し、今は神社と寺院は分けられているので別々の存在と見てしまうのだが、両者は本来一体の存在だった。本尊は聖観世音菩薩像で紀伊国那智山長命寺から伝来したという伝承を持ち、その前身は木原権現の本地仏(ほんちぶつ・神が仏の姿で顕れたもの)を祀る本地堂であったと考えられる。

天文 5 年(1532)に、海蔵寺八世住職の名を借りて、曹洞宗の檀家寺となり熊野色は次第に薄れて行く。毎年お盆には市の指定文化財となっている木原大念仏の奉納がこの本堂前で行われている。では長命寺のルーツを探しに熊野三山の一つ那智山を訪ねてみよう。(山)

第 59 回 熊野信仰と袋井 23 海の熊野と袋井

木原に所在する那智山長命寺の本尊は、紀州熊野三山を構成する那智山から伝来したと伝える。

実際の山岳としての「那智山」は、那智の大滝として有名な落差 133 メートルの水源となる大雲取山(966 メートル)・烏帽子山(909 メートル)・光ヶ峯(686 メートル)・妙法山(749 メートル)という自然林が広がる山々の総称だが、この「那智山」は宗教組織として、神仏を混然一体として祀る一山組織の事を指す。

熊野本宮・熊野新宮・那智それぞれ別の宗教組織が一体となって活動を始める「熊野三山」の枠組みは、平安時代末の 12 世紀代に成立する。その一つ「那智山」は那智滝そのものを御神体として崇拝する飛瀧権現(千手観音)から始まり、やがてこれを核に那智十三所権現を第一殿から第六殿に分けて祀る社殿群、本地仏を祀る如意輪堂を中心とする青岸渡寺が設けられ、奥の院に相当する妙法山阿弥陀寺(那智滝が妙法山に登拝するための禊祓の地)と那智浜に面した浜之宮の補陀洛山寺の三者全体を管理運営する組織のことであり、全域を描いたのが江戸時代前期に成立した「那智参詣曼荼羅」である。

那智参詣というのは、那智浜で身体を浄めて浜之宮に手を合わせ、青岸渡寺で大滝に手を合わせ、滝壺の水で再び身体を浄めて妙法山に登り満願するものであった。

歴史上熊野参詣は 15 世紀代(室町時代)が最盛期で、山内には多数の宿坊が営まれた。果たしてこの中から長命寺は見つかるのだろうか。(山)

第 60 回 熊野信仰と袋井 24 海の熊野と袋井

「蟻の熊野詣」と言われたほど平安時代後期～鎌倉時代にかけて多くの貴紳が訪れた熊野三山であったが、実際に那智山への参詣が盛んとなったのは地方武士や有力農民が参詣者の主体となる 15 世紀代であった。

この頃、西国三十三ヶ所観音霊場札所への巡礼の形が整いはじめ、その一番札所が那智山(現在の青岸渡寺)であったこともあり、熊野三山で那智山が特に賑わっていた。しかし応仁の乱以後、世の中は戦国の世となり安全な旅ができなくなる 16 世紀には衰退し始める。

国の世となり安全な旅ができなくなる 16 世紀には衰退し始める。

諸国には「熊野先達」と呼ばれ、熊野への道案内と出発時や途中の社寺で行う様々な宗教儀礼が執行できる専門の案内人(山伏)が居住しており、「御師(おし)」と呼ばれる山内の特定の宿坊と契約を結び、参詣人を導いていた。無論、袋井市内にも、この熊野先達は居住していた。

平和な江戸時代になると、伊勢詣の延長として熊野参詣は再び盛んとなる。徳川幕府が紀州藩に命じ、33 年もの歳月をかけて天保 10 年(1839)に完成した『紀伊続風土記』卷之七十五牟婁郡那智山社僧坊舎の項には、当時の山内組織が記されている。それによると山内には禰宜(ねぎ)・神主はなく全員が社僧という神に仕える妻帯、非妻帯の僧侶集団で構成されていた。

トップが清僧(せいそう／非妻帯)執行(しぎょう)天台座主の潮崎尊勝院で、配下に東西両執行 2 人(清僧真言宗西座 西仙瀧院、妻帯僧天台宗東座 潮崎圓乗院)一宿老 10 人一講師 12 人一衆徒 75 人一瀧衆(山伏)66 人一役人 12 人一行人 85 人一穀屋(聖) 7 人で、これに妻子が加わる大所帯からなり、山内の宿坊 22 坊を運営し諸国からの参詣人を分宿させていたが、これらの記録類には袋井市木原にある長命寺に繋がる記載は見られない。(山)

第 61 回 熊野信仰と袋井 25 海の熊野と袋井

先に「那智山」が山そのものを指すのではなく、一山という宗教組織であることを紹介した。この那智一山を構成する要素の一つに、那智浜に面した「浜宮天台宗補陀洛寺」があった。明治の神仏分離で浜宮王子社(現在はゆかりの地に熊野三所大神社の社殿が建つ)と補陀洛山寺とに分離されてしまったが、かつては神仏が共存し融合する空間であった。

浜宮は補陀洛渡海(ふだらくとかい)と言って、南海の彼方に在るという観音の「補陀洛浄土」に往生するため、修行者が長年の修行の最後に渡海船内に閉じ込められ、死出の旅へと向かう起点の場所であった。他に土佐の足摺岬、室戸岬からも渡海した記録が残っている。

海の熊野信仰の根底には、この補陀洛浄土への観音信仰があり、袋井市内海岸部に所在する寄木大明神(寄木神社)や原野谷川流域に分布する十一面観音を本地とする若一王子がその影響のもとで祀られた。

補陀洛山寺には実物大で復元した渡海船が公開されている。その構造は和船上に入母屋造りの箱を設置し、四方には死者の悟りの段階を示す発心門(ほっしんもん)・修行門・菩提門・涅槃門の四門(しもん)が設けられ、その間を四十九の塔婆を象った瑞垣(みずがき)で囲う。

船内には 60 日分の食糧を積み込み、修行者が狭い箱の中に乗り込むと、外から閉じて釘付けにされ、船に曳かれて沖合まで出たら綱が切られ、海流に乗って観音浄土への往生を目指した。中には日叟上人のように琉球に流れ着き布教活動に生涯を終えた僧も実在した。

補陀洛渡海は平安時代後期から鎌倉時代が最も盛んで、戦国時代までは、命がけで実践されたが、平和な江戸時代になると亡くなった渡海僧を形式的に渡海させ、水葬という形に変化していった。補陀洛山寺には 20 名程の渡海僧の記録が伝わっている。(山)

第 62 回 熊野信仰と袋井 26 海の熊野と袋井

那智一山を構成する要素の一つに妙法山がある。ここは那智山の山神を祀る奥の院に相当する場所で、59 回に紹介した「那智参詣曼荼羅」の左上に描かれている。

現在は真言宗の那智山阿弥陀寺という独立した寺院だが、江戸時代には那智山の末寺で『紀伊続風土記』(1839 年)によると、十方浄土堂・弘法大師堂・骨堂・阿弥陀堂・客殿・庫裏・長屋・勧化所・鎮守社・鳥居の各施設が存在したことがわかる。

妙法山上からは視界一面に太平洋が広がり、補陀洛の浄土を実感することができ、海の信仰が山と連動することが良くわかる場所でもある。

妙法山には勧化所が設けられ、堂舎の修理や復興を請け負い、諸国を勧進して歩く聖たちの詰め所であると同時に、骨堂が設けられ、納骨と死者供養を行う空間でもあった。死者の魂はシキミの葉を手にして妙法山へ参詣し、一つ鐘を撞くという伝承があることから、熊野参詣に訪れた人々は先祖供養のため妙法山に参拝し、山頂十方浄土堂の本尊に手を合わせる。この像は釈迦如来とされるが、よく見ると顔は仏なのだが白木の荒彫りの立像で手先を出さず衣で覆っている。これは御神木を彫りつけた、神像特有の表現で、妙法山の山神と仏とが融合した特有の姿だと考えられる。

これまで、市内に所在する木原の那智山長命寺のルーツを求めて、神仏分離によって変貌する以前の那智山一山の内容を順を追って見てきたが、どこにも長命寺に繋がる痕跡を見いだすことはできなかった。では、ルーツはどこにあるのだろうか。「長命寺」という名前をたよりに、原点に戻って考え直した方が良いようだ。(山)

第 63 回 熊野信仰と袋井 27 海の熊野と袋井

市内の木原に所在する那智山長命寺のルーツを訪ねて熊野三山を構成する一つ、那智山を検討したが、その痕跡を推測させるものは残念ながら見つからなかった。そこで、ここからは目線を変え、寺号の「長命寺」から糸口を探ることにしよう。

長命寺という寺号からまず連想されるのが、近江国の姨綺耶山(いきやさん)長命寺だ。現在の地名では滋賀県近江八幡市になる。この寺院は室町時代に成立した西国三十三観音霊場の第三十一番札所として知られている。

那智山が第一番札所なので、長命寺と那智山は同じ西国三十三観音霊場の札所同士という関係にあり、つながりを有していることから期待できるかもしれない。

寺院は琵琶湖畔にそびえる長命寺山の中腹に位置し、麓から本堂に至る 800 段の階段で知られる。観音霊場への巡拝は戦国時代には一時途絶えるが、江戸時代後期になると交通の発達、貨幣の普及と庶民生活の安定が背景となり伊勢参宮をはじめ、遠隔地への社寺参詣が流行した。その頃の長命寺山は現在のような陸続きではなく、島だったので、三十番札所の竹生島宝厳寺から船で山麓の湊に直接乗り付けて参拝している。

ところがこれから検討したいのは、多くの庶民が巡礼札所として参詣した江戸時代後期の姿ではなく、木原の長命寺が成立した天文五年(1532)以前の近江長命寺の実態と景観がどのようなものか、である。

長命寺山は「洛叉峰(らくしゃみね)」と呼ばれる山塊の南端にあたり、北端の伊崎不動尊を本尊とする伊崎寺までつながる山伏の山林行場であった。伊崎寺は日本仏教の母体とされる比叡山で、回峰行(かいほうぎょう)と呼ばれる霊山を巡る山林修行(千日回峰行の原型)を創始した相応(そうおう)が修行場として開いた聖地で、伊崎寺五ヶ寺と呼ばれる山伏集団が洛叉峰の行場・山中行者道の維持管理を行い、その中に長命寺が含まれる。つまり長命寺には山伏集団も存在していたわけだ。(山)

第 64 回 熊野信仰と袋井 28 海の熊野と袋井

今回は長命寺の境内を案内しよう。琵琶湖岸の長命寺港に着くと正面には広場がある。右手には穀屋聖(こうやひじり)の詰め所で勧進所であった穀屋寺、左手には日吉山王権現(ひえさんのうごんげん)の社殿が現存し、そこから山上に向かって一直線に石段の参詣道が延び、俗に「八百八段」と呼ばれ、登るには 20～30 分を要する。

参詣道の両側には土留めの石垣を積み上げた子院や宿坊の跡が延々と続き、元禄 5 年(1692)の記録では 19 の子院が存在したが、今では石段の途中左手に妙覚院・真静院、さらに上がると右手に禅林院・金乗院の 4 院が残るだけである。

参詣道を登り切ると冠木門(がんぎもん)があり、これをくぐると中心伽藍へと踏み込むことになる。ここまでは石垣と建物跡の平場が残るだけだが、様相は一変する。

左手に本坊、右手に手水所(ちょうずしょ)があり、ここで手を浄める。見上げると、ひととき大きな朱塗りの入母屋造(いりもやづくり)、檜皮葺(ひわだぶき)建物が聳えるのを目の当たりにする。この建物は少なくとも五百年來、無数の西国三十三観音札所の巡礼者が目指した本堂の観音堂(大永 4 年／1524)で、重要文化財に指定されている千手観音像・十一面観音像・聖観音像の三像を厨子内に祀り信仰の核心をなしてきた。

傍らには三重塔(慶長 2 年／1597)が配置され、これ以外にも護摩堂(慶長 11 年／1606)、三仏堂(永禄年間・16 世紀半ば)、護法権現社(永禄 8 年／1565)鐘楼(慶長 13 年／1608・以上は重要文化財)と多くの歴史を刻んだ建物が集中する別世界が拡がり、ここからは琵琶湖の景観を楽しむこともできる。

このような多くの建物は穀屋寺を活動拠点とした聖たちの勧進活動によって再建や修理を重ね、現在に引き継がれてきたものだ。では彼らが活動した室町時代の長命寺の姿を追って見よう。(山)

第 65 回 熊野信仰と袋井 29 海の熊野と袋井

市内木原に所在し、天文 5 年(1532)に成立したと伝える那智山長命寺のルーツを求め、その糸口を得るために近江国に所在する西国三十三観音霊場の第三十一番札所の姨綺耶山(いきやさん)長命寺を探っている。

幸いなことに 16 世紀代の長命寺一山の景観は、『長命寺参詣曼荼羅』(縦 155～161 cm×横 159～180 cm)と呼ばれる一幅の絵画資料に詳細に描かれており、その年代は戦国末期と推定されている。これを見ると湖辺から本堂のある山の中腹まで、無数の堂・社・子院・宿坊等がひしめき合い、多くの参詣人が訪れた状況が良くわかる。

これは数年前に勧進聖(かんじんひじり)の詰所であった穀屋(こうや)と呼ばれる建物から見つかったもので、同じものが三幅あり、いずれも三つ折りに畳んだ状態で残されていた。それは持ち運んで掲げ、喜捨を求めるために唱導を行った生々しい証拠である。

勧進聖は長命寺の再建を目的として浄財を勧進することを許可された聖で、参詣曼荼羅を長命寺の内外で絵解き・唱導し、その勧進に結縁(けちえん)した人々に、宗教的・社会的作善(さぜん)を勧め、合わせて長命寺の本尊札や牛玉札(ごおうふだ)などを配布して、浄財を募った。細かく見ると、本堂右下山中の木立の中には、屋根だけ描かれた宿坊や子院がところ狭しと描かれ、そこを通る道には、本堂に通じる参詣道より多くの参詣者が描かれ、賑わいを見せている。実は、これが、穀屋を拠点として活動した聖たちの住まいと考えられるわけだ。(山)

第 66 回 熊野信仰と袋井 30 海の熊野と袋井

近江の姨綺耶山(いきやさん)長命寺に属する聖(ひじり)の詰め所、穀屋(こうや)から発見された参詣曼荼羅には、本堂への参詣道「本坂」以外に聖の宿坊が建ち並ぶ脇道「裏坂」のようすが描写され、そこを通る多くの参詣人と回りに小さな建物の屋根が密集して描かれている。

聖は諸国を回り、西国三十三観音札所巡礼の功德を説き、浄財を募り、個人から代理参拝を請け負った。寺院からは堂社再建を目的とした勧進活動を請け負い、積極的に本願となる大寺院を渡り歩いて活動を展開した。

長命寺に属する聖の活動は、木原の「那智山長命寺」が正式な寺院として成立した天文 5 年(1532)頃が最も盛んで、山内には宿坊と住坊を兼ねた子院が次々に建てられ、諸国には出先としての堂が設けられたが、徳川幕府が成立すると、所属が曖昧で定住性の薄い聖の活動は厳しく制限され、急激に衰退した。長命寺裏坂の子院も例外ではなく、早くに廃墟となった。

これまで木原に所在する「那智山長命寺」のルーツを訪ねて旅を続けてきた。私はこの寺は、その名が示すとおり、那智山の観音信仰(那智山は熊野三山の一つで熊野信仰の中心、西国三十三観音第一番札所の観音信仰の起点でもあった。)と長命寺の観音信仰(那智山と同じ西国三十三観音第三十一番札所)の両者が融合したもので、幹線道路の東海道に面した立地の良さから勧進聖(穀屋聖)、廻国聖、熊野先達と呼ばれた人々の活動拠点(観音堂)として始まり、やがて海蔵寺住職を招聘して正式な寺院に発展したというストーリーを描いている。では、次回からは本体の木原権現について考えて行こう。(山)

第 67 回 熊野信仰と袋井 31 海の熊野と袋井

東海道の街道に面した集落の一つに木原（きわら）村があり、その中央には木立に囲まれた「木原権現(きわらごんげん)」あるいは祭神の名でもって「熊野権現」とも呼ばれた神社の社殿が鎮座している。読者は木原権現と言っても、ピンとこないかもしれない。現在の社名が許禰神社(こねじんじゃ)となっているからで、この社名は幕末の慶応 4 年(1868)から新たに使い始めたものだ。

『延喜式神名帳(えんぎしき じんみょうちょう)』という、延長 5 年(927)に朝廷によってまとめられた記録がある。これには当時「官社」に指定された全国の神社一覧が記載され、それを延喜式内社(えんぎしきないしゃ)と呼んだ。その中に「遠江国山名郡許禰神社」とあるのを、当時の宮司が木原権現はこれに当たると主張して改称したことによる。

明治新政府により慶応 4 年 3 月 28 日に「神仏判然令(しんぶつはんぜんれい)」という命令が出され、神社で仏を祀り経典や仏具を持つことや、神仏が一体となった権現・大菩薩・明神という尊格を用いてはならないという方針が示された。これにより、全国一斉に神社から仏教色を排除し、社名や祭神の変更が行われた。木原権現はその機運に乗じて、社名を歴史があり、格式は高いが実際、どれがそれに該当するか不明となっていた「許禰神社」が当社のことだとして登録した。それ以後この社名を正式に名乗り、祭神を伊弉諾命(いざなぎのみこと)、速玉男命(はやたまおのみこと)、事解男命(ことさかおのみこと)と定めた。

歴史を遡ると木原権現は平安時代後期に紀伊国藤白王子権現(和歌山県海南市)から熊野権現の王子神が勧請され、神職の鈴木家も共にこの地に移り住んだことから始まっている。(山)

第 68 回 熊野信仰と袋井 32 海の熊野と袋井

慶応 4 年(1868)に延喜式内社である許祢(こね)神社と名を改めた木原権現の歴史を探る手がかりを検討して行こう。木原権現の神主は代々、木原家が世襲しており、その史料が今も残されている。中でも特筆されるのが『木原権現由来記』という巻物である。

奥書(おくがき)によると、寛永 19 年(1642)に当時の神主であった鈴木久次が、社記の散逸を恐れて編集したもので、全長 17m に及ぶ長大なものである。その内容は全体を 8 つの部分で構成し、熊野権現の勧請(かんじょう／神仏の分霊を他の場所に移し祀ること)から始まり、御神体・年中行事・造営の由来に触れ、最後に神主家の系図を記している。

勧請の部分では「木原の社は熊野権現である。人王 72 代白河院の時、木原郷に一筋の川があり、強雨で水位も高くなり田畠を浸してしまった。村人は悲しみ、永保 2 年(1082)3 月に堤を築こうと集まると、そこには鳥がたくさん群がり、白幣が出現していた。人々が不思議に思っていると、子供が神憑りして『我は熊野権現である。この地に鎮座して何年にもなるが、殆どの者がこれを知らない。この地を神聖にして我を祀るならば水難を防ぎ、五穀豊穰にするであろう』と託宣した。木原の人々はこれにより社を建て、白幣を納めて木原権現と呼び大切に祀った。」という内容である。

この下線部分は慶応 4 年頃に式内社にふさわしく、古く見せるための改竄が施されている。具体的には人王 72 代白河院を人王 42 代文武天皇、永保 2 年を大宝 2 年(702)と水を付けて擦り、そこに墨で書き込んだ痕跡があることが、詳細な研究によって解明されている。

原文書から読み取れるのは、水害の難から村を守ることを目的に熊野権現の若宮を永保 2 年に勧請したということである。実はこのキーワードが今後木原権現の歴史を解明する重要な鍵となって行く。(山)

第 69 回 熊野信仰と袋井 33 海の熊野と袋井

市内の木原権現は熊野神の若宮を永保 2 年(1082)に勧請したことを前回指摘した。その勧請元は藤白王子権現(和歌山県海南市藤白/現在は藤白神社という)であることがわかっている。藤白王子は熊野九十九王子(くまのつくもおうじ)の一つで、その中でも格別とされた五体王子に数えられる。

熊野九十九王子は熊野参詣道(熊野古道と呼ばれる)沿道のいたるところに熊野権現の分身である王子神が配置されたもので、数多(あまた)あるということで九十九(つくも)と呼ばれる。これらは参詣者を守護すると共に、巡拝しながら熊野三山に近づいて行くという仕組みだ。

そのなかで藤白、切目、稲葉根、滝尻、近露の諸王子は主要拠点の王子社として五体王子と呼ばれた。道中の渡河点や海辺ではみそぎの場所が定められ、藤白王子に一ノ鳥居、滝尻王子～熊野本宮間には三百町の卒塔婆、発心門王子には大鳥居が立っていた。一ノ鳥居が設けられた藤白王子は熊野世界の入口というわけだ。

中世熊野御幸(ごこう)の盛期には特に格式の高い王子として崇拝され、熊野参詣に向かう上皇以下貴顕の一行が社頭に到着すると、歌会・里神楽・相撲などの奉納が行われるのが通例であった。この神社は藤白鈴木家が代々神職を務め、その家系が全国の鈴木性の発祥とされる。これについては改めて紹介しよう。(山)

第 70 回 熊野信仰と袋井 34 海の熊野と袋井

藤白王子は熊野世界で唯一、明治初期の神仏分離以前の信仰の姿と心を窺うことができる稀少な存在であり、熊野信仰を理解する上で避けて通れない霊場である。

本殿横には現在、王子権現本地堂(ほんちどう)と呼ばれる建物が軒を並べ建っている。熊野三山(熊野本宮・熊野新宮・那智山)の祭神には多様な神仏が存在するが、その特徴は神と仏が融合した権現(ごんげん)と呼ばれる神を祀ることにある。権現は山の神の化身で、顕れる時は神の姿の場合も仏の姿の場合もあり、変幻自在の存在だ。

本地とは仏教の立場からの言葉で、神本来の姿という意味を持ち、本地堂は権現の仏としての姿を祀る仏堂である。堂内には向かって左から那智山の祭神である夫須美大神(ふすみのおおかみ)の本地、千手観音座像・熊野本宮の祭神である家都御子大神(けつみこのおおかみ)の本地、阿弥陀如来座像・熊野新宮の祭神である速玉大神(はやたまのおおかみ)の本地である薬師如来座像という三神の本地仏と、ここ藤白王子の祭神、藤白若一王子(ふじしろにゃくいちおうじ)権現の本地である十一面観音立像が鎮座している。

この四軀(く)の仏はいずれも熊野御幸が盛んだった平安時代末 12 世紀の木彫仏で、もとは藤白王子の神宮寺であった中道寺に祀られていたものだが、豊臣秀吉の紀州征伐時にゆかりの寺院に避難して難を逃れたのを、江戸時代に戻したもので、総てが揃うのはここが唯一の存在である。

以前の仏教色が殆ど失われていることを考えると、藤白王子に伝わる四軀の本地仏が持つ意味は大きい。木原権現はこの藤白王子権現を勧請して祀り始めたと考えており、かつての本殿内には同じ十一面観音立像が祀られていたのではないだろうか。(山)

第 71 回 熊野信仰と袋井 35 海の熊野と袋井

現在の藤白神社境内入り口(北側)には「鈴木屋敷」と呼ばれる古い住宅建物と、屋敷の前には「曲水園」という、室町時代に造られたと考えられる日本庭園がある。

この藤白王子の鈴木家は、熊野信仰を広めた神官一族の藤白鈴木氏がかつて居住していた屋敷とされ、全国で二番目に多く 200 万人ほどいる「鈴木」姓の発祥の地といわれる。

特に藤白発祥の鈴木姓は太平洋沿岸に分布し、東海地方から東北地方に広がっている。つまり、黒潮を巧みに利用し、海を介して熊野信仰を広めたわけだ。明治の世となり、戸籍が作られ庶民が正式に姓を名乗ることができるようになると、熊野信仰の盛んな地域では藤白鈴木姓にあやかって鈴木姓に登録し、名乗るようになったのだという説明を聞いたことがある。

市内木原権現の神主家に伝わる『木原権現由来記』の巻末には、代々の神主の系図が記されていて、初代は、「鈴木宮内少輔穂積忠猶 紀州藤白鈴木三郎重家従弟藤白住」二代が「木工助忠重 紀州熊野ヨリ遠州木原郷来神主被補」とあり、こうした伝承を記録の上から裏付けることができる稀少な事例である。(山)

第 72 回 熊野信仰と袋井 36 海の熊野と袋井

市内木原に所在する木原権現(現在の許禰神社)は紀州藤白王子権現を勧請(かんじょう)して成立したものであることを、旧神主家に伝わる『木原権現由来記』を紐解きながら紹介してきた。

藤白は熊野九十九(つくも)王子と呼ばれ、あまた存在する熊野の王子神のうち、最も重要視された「五体王子」と称される五柱の王子神の一つで、その神域から奥が熊野世界と考えられていた。藤白は都から見て、熊野の玄関口という位置づけであった。

その藤白王子権現が仏の姿に変化(へんげ)して顕れると、十一面観音(本地と言う)の姿となる。この十一面観音は熊野世界では、伊勢の天照(アマテラス)にあたると解釈している。三重県熊野市にはイザナミノ命の神霊が鎮まる花ノ岩屋がある。アマテラスはイザナミノ命の御子神なので二柱の神は親子関係となり、熊野側ではこれを根拠に熊野と伊勢は同体だと主張し、アマテラスを十一面観音として祀ってきた。藤白王子権現はアマテラスでもあるわけだ。袋井市内を流れる原野谷川流域の熊野系の寺社には、十一面観音像の濃厚な分布が見られる。例えば写真の富里王子権現の十一面観音像(室町)、西ヶ崎熊野三所権現像(江戸)、諸井十二所権現懸仏(鎌倉)、中野白山神社の懸仏(室町)などだ。

それは、伊勢を同体だと主張する熊野の古い信仰がこの地に置かれた県内最古の熊野山領である山名荘に直接伝わったからで、その後も両者の密接な交流が長く続いた歴史を反映している。(完結・山)

第 73 回 御霊信仰と袋井 1 祇園

今回から新たに、袋井に伝わる多様な御霊信仰(ごりょうしんこう)の様相を紹介する。「御霊信仰」と一口に言っても、何のこと?と思われるだろうから、まずは言葉の説明から入らせてもらう。

平安時代の初め頃(9世紀)のこと、政争に巻き込まれて非業の死をとげた者の霊は怨霊(おんりょう)となってさまよい、祟りをなすと信じ恐れられ、それを「御霊」と呼んだ。

浮遊する御霊を手厚くもてなし、祟りを封じ込めようとする仏教法会を「御霊会(ごりょうえ)」と言い、平安京の神泉苑(しんせんえん)という竜神を祀った苑地を会場に貞観5年(863)に朝廷の手で初めて行われた。法会だから執り行ったのは、真言・天台の密教僧である。

我が国古来の神々への信仰は自然崇拝から始まるので、農耕に欠かせない水源や形状の美しい山を崇めたり、雷などの自然現象を神として崇拝したりするもので、そこには、個人の霊を祀り、救済するという要素が欠落していた。それに応えたのが仏教であった。怨霊は社殿を建て、食事を施すことによって和み、鎮まり、やがては、崇敬する者を加護する御霊神となる。

貞観5年の御霊会は都で猛威を振るっていた疫病の原因とされる「霊座六前(れいざろくぜん)」と言われた6名の冤魂(えんこん／無実の罪で死んだ者の霊)を慰めるために行ったものだ。

その6名の中には、市内山梨にあったと考えられる、板築駅(いたつきえき)で亡くなった三筆の一人、橘逸勢(たちばなのはやなり)の御霊も含まれていた。これが山梨の祇園のルーツにつながる。

市内には各地に津島神社、牛頭天王(ごづてんのう)神社、八雲神社など祇園系の神社や祠が設けられ、三川地区ではお盆に朝長公御祭礼(ともながこうごさいれい)が執り行われるというように、多様な御霊信仰の姿を見ることができ、これらを都との繋がりに留意しながら順次紹介しよう。

(山)

第 74 回 御霊信仰と袋井 2 祇園

京都市街の中央部を東西に貫く四条通りの突き当たりには「祇園さん」の通称で知られる八坂神社がある。テレビドラマ等に西楼門と石段下の風景は良く画面に登場するので、観光時に立ち寄った人も多いのではないだろうか。

この八坂神社は明治元年(1868)に実施された神仏分離以前は、「感神院祇園社(かんしんいんぎおんしゃ)」という名の「宮寺(みやてら)」で天台宗比叡山の末寺であった。宮寺？この文字を初めて見た人も多いだろう。

明治新政府が誕生してすぐに、一大宗教改革が断行され、千年以上続いた神と仏を一体として祀る思想と形が崩壊した。それ以前には感神院のような、お宮と寺とが渾然一体となった宮寺が全国にはたくさんあり、祇園系・天神系の神社の多くが明治維新以前には宮寺だった。

祇園社は寺院の伽藍配置と同じ南北軸(下図直線)上に大門・中門・拝殿・本殿が並ぶ。所属する宗教者に神職はおらず、社僧(しゃそう)と呼ばれ、神に仕える僧侶集団だけが存在し、しかも妻帯して役職を世襲していた。

本殿には祭神の牛頭天王(ごずてんのう)を中心に后と八柱の王子神が祀られ、その横には牛頭天王が仏の姿で顕れた薬師如来像を祀る本地堂(ほんちどう)が並んでいた。現在の感覚で見ると、祇園社は実に不思議な空間であったわけだ。(山)

第 75 回 御霊信仰と袋井 3 祇園

通常、神社建築は本殿と拝殿という個別の建物から成り立っているが、感神院祇園社(かんしんいんぎおんしゃ)と呼ばれた八坂神社の本殿は、神殿と礼堂(拝殿)が一体化した仏教建築の様式で、特に「祇園造(ぎおんづくり)」と呼ばれ 10 世紀に成立している。

しかも、内部空間を拡げるために、堂の左右、背面の三方向に孫庇(まごひさし)を付けて神饌所(しんせんじょ)・御供所(おんくしょ)とし、特に堂の背面空間は、社務執行(しゃむしぎょう)という、祭神の牛頭天王(ごづてんのう)に奉仕する僧侶集団の詰め所となり、仏教色が濃厚な空間であった。

皆さんは四条通に面した八坂神社西楼門(祇園石段側の門)をくぐった正面に「疫神社(えきじんしゃ)」と呼ばれる小祠があるのをご存じだろうか？これが祇園社の起源となった御霊＝疫神を祀った名残で、遠州に拡がる祇園系祭神のルーツである。根源は意外に地味で忘れられる運命にあるようだ。(山)

第 76 回 御霊信仰と袋井 4 朝長公御祭礼

御霊信仰の中核ともいえる祇園信仰の説明を、京都八坂神社を起点に進めている。まだ途中であるが、市内でも諸行事が行われる夏場になってきたので、いったん袋井の事例に移そう。

毎年 8 月 15 日の夜に、袋井市の文化財指定を受けた源朝長公御祭礼(みなもとのともながこうごさいれい)という念仏行事が行われている。この祭礼は長い年月の間に変化し、現在では盆行事の念仏供養という形をとるが、三川地区に根付き、継承されてきた御霊信仰の代表事例といえることができる。

祭礼の主人公である源朝長は 1160 年(平治元)に起きた平治の乱で平清盛に敗れた源義朝(みなもとのよしとも)の次男で、父義朝とともに京都から東海道へ落ち延びる途中で落ち武者狩りにあい、受けた矢傷のため自害して果てた。都でさらされた朝長の首を、家臣である大谷忠太(おおやのちゅうた)が夜の闇に紛れ、故郷の大谷村に持ち帰り供養塔を建てたと伝えている。

三川の積雲院(せきうんいん)入口には鎌倉時代末期の緑色凝灰岩製(焼津市当目石(とうめいし))の五輪塔 3 基が大切に祀られ、江戸時代後期に編纂された『遠江古蹟図絵』の絵図では向かって左側が義朝、中央が朝長の兄の義平(よしひら)、右側が朝長の供養塔と記されている。建立は朝長の死から 150 年ほど経った鎌倉末期、背景には御霊信仰が盛んとなり、不遇の死をとげた著名人を対象とした御霊会が各地で行われ始めたことにありそうだ。(山)

第 77 回 御霊信仰と袋井 5 朝長公御祭礼

毎年 8 月 15 日の夜に行われる朝長公御祭礼は次のように行われる。

1 宮の前夜の 9 時頃、三川地区の御沙汰神社(ごさたじんじゃ)前に青年と七人の子ども達が集まる。古くは各戸から一名ずつ出ていたが、明治以降、友永成年舎、保存会へと引き継がれ、現在に至っている。一行は、広場の中央に傘と幟(のぼり)を立て、青年が傘を背に並び和讃「宮の前」を謡(うた)い、子ども達は長い竹を持ってその周りを廻る。

2 道行(みちゆき) 謡が終わると子ども念仏で使った盆車(ぼんぐるま)の太鼓を鳴らしながら積雲院に向かう。行列は集落の中を進み、途中で南を向き和讃「平松(ひらまつ)」を謡う。その後、行列はあとずさりしながら供養塔の祀られる積雲院の境内に入る。あとずさりという後ろを見ない行為をすることによって、背後に異界が顕れるのだという。

3 供養塔の前 一行は供養塔の前で一列になり「平松」を謡う。円形に並び直し、再び傘と幟を立て、これを中心に青年が輪を作り「平松」が謡われる。子ども達は青年の廻りを時計回りに廻り、謡いが終わると、参詣者は子ども達が持つ笹竹を奪い合う。これを門口に立てると災難除けになると信じているからだ。

この御祭礼は、源朝長への御霊信仰が基盤にありながら、子ども念仏の行事と習合(しゅうごう／異なるものが一つになること)して盆行事になったものである。「御霊信仰」と一口に言っても、長い歴史のなかで多様な展開をとげ、現在に繋がるということを教えてくれる。(山)

第 78 回 御霊信仰と袋井 6 「お盆」とは何を指す？

9月号の記事を、お盆の直前に書いていて、「御霊信仰は不慮の死を遂げた人々の魂を救済するための法会、一般の先祖供養は8月のお盆期間中に行われる。今回は、意外と知られていない『お盆』の語源を書こう」と、ふと、ひらめいた。

実は、お盆は仏教に基づくものではない。それは、字が示すとおり供物を乗せ、お供えする「(丸)盆」からきている。

以前、奈良市の春日大社で、春日神への神饌物に関する講義を受けたおり、数百年間使い込んでいる「お供え盆」を詳しく観察する機会があった。漆塗りの丸盆は供えるものによって、大中2種類の違いがあり、表は朱漆、裏面は黒漆で塗られ高台の内側には螺鈿で花卉の模様があしらわれている。持ってみると意外と軽く持ちやすい。丸い形は太陽や鏡に通じ、円は天台教学では完全なものを顕すという。

神饌所で調理された神饌や供物はこのお盆に盛り付けられ、回廊を抜け、坂道を通って、楼門内の本殿に供えられる。この間、少し距離があるので、風が吹いてこぼれ落ちたり、バランスを崩して落とすことがあり、その場合は、「不備があるので神様が取り上げようとなさらなかったのだ」と言って、作り直すそう。

「お盆」とは先祖の魂をもてなすために、魂のよりしろ(近世後期以降は位牌)に対して、夏に収穫した麦で加工した素麺やうどんを供える収穫祭であり、そのお供え用の盆が、この風習の呼び名になったというわけだ。

お盆に行われる法会(ほうえ/仏事)を「盂蘭盆会(うらぼんえ)」という。これはインドのサンスクリット語「ウラムバナ」の音写 盂蘭盆(うらぼん)からきたもの。ウラムバナとは手足を縛られ逆さまに吊された状態を表す。盂蘭盆会は地獄に墜ち、非常に苦痛な状態にある魂を救済する法会で、同じ盆の文字が用いられているが、供物を盛り付ける盆とは関わりがないものであった。

(山)

第 79 回 御霊信仰と袋井 7 御霊会のはじまり

祇園祭に代表される夏の御霊会シーズンが終わったので、再び原点に戻り御霊会のはじまりについて説明しよう。

これまで御霊に関する史料上の初出は、『日本三代実録』の貞観 5 年(863) 5 月 20 日の条で、平安京神泉苑において、我が国初の御霊会が催された事が記されている。

ところが近年の研究により、これを半世紀遡る弘仁 4 年(813) 6 月に御霊会の先駆となる法会が、天台宗を開いた最澄により比叡山において行われていることが明らかとなった。これは平安京の始まりとともに、国家行事として御霊会(信仰)が始まったことを示している。

当時は、政変により命を奪われ、怨霊となった魂が様々な災害を引き起こす元凶と考えており、大いに恐れられていた。そこで、これらを手厚く祀ることにより、仏法の守護神となることを期待した。背景には怨霊転じて護法善神となるという思想が存在している。

貞観 5 年 5 月に行われた御霊会では崇道天皇(早良親王／さわらしんのう)、伊予親王、藤原夫人(藤原吉子)、橘大夫(橘逸勢／たちばなのはやなり)、文大夫(文室宮田麻呂)、觀察使(藤原仲成もしくは藤原広嗣)の魂を祀ったもので、六所御霊と呼ばれている。

この祭神を社殿で恒常的に祀ったのが上御霊神社・下御霊神社の二社である。両社ともに戦乱や焼失によって移転したが、上御霊神社は京都市上京区上御霊前通烏丸東入上御霊堅町に、下御霊神社は京都市中京区寺町通丸太町下ル下御霊前町に所在している。

下御霊神社は、現在は御所の東南隅に位置し、祭礼時には神輿が御所内に渡御し、公家衆の守護神となっていた。祭神のうち、三筆の一人として著名な橘逸勢は、市内山梨地区と深い関わりを持っているが、これについては、後に詳しく紹介することになる。(山)

第 80 回 御霊信仰と袋井 8 御霊会のはじまり

前回は御霊を鎮めるための法会(ほうえ／仏教行事)が、天台宗を開いた最澄により、比叡山で弘仁 4 年(813)に行われ始め、朝廷も都に疫病が流行ったことをきっかけにして、その元凶が政変により命を奪われ、怨霊になった魂だと考え、平安京の神泉苑という龍神の棲む池を中心とした大庭園で、貞観 5 年(863)5 月 20 日に 6 人の御霊を鎮める法会を行い、これが京都の洛中に現存する上御霊神社・下御霊神社に繋がることを紹介した。

神泉苑では貞観 11 年(869 年)に池の南端に 66 本(当時の律令制度の国の数)の鉾を立て各国の御霊を祀り、これが現在の京都祇園祭の始まりであると伝えている。

これに対し民衆による御霊信仰の古い形を伝える、「やすらい祭」(夜須礼(やすらい))「鎮花祭」(やすらい花)ともいう)という行事が今も京都市の紫野や上賀茂など洛北の四地区に伝承され毎年 4 月に行われている。

桜の花が散る頃、疫神は花の精にあおられて、いたずらをして回り、疫病を引き起こすと考えた。そこで人々はたくさんの生花で飾られた大きな赤い花傘(はながさ)を作り、その廻りで「しゃぐま」と呼ばれる赤毛・黒毛の鬼たちが、笛や太鼓のお囃子(はやし)に合わせて、長い髪を振り乱しながら「やすらい花や」の掛け声とともに踊り、洛中の悪霊や御霊を花笠に集めて廻り、最後は厄神を祭ったことに始まる今宮神社に巡行して終わる。

おそらく御霊はそこに納められ、疫神として祀られるのであろう。悪神も手厚く祭られることにより、善神に変わるという発想だ。やすらい祭は鎮花祭(ちんかさい)という「はなしずめの祭り」の一種で、見物に訪れた人々は踊りの合間に競って花笠の中に入り厄を祓っていた。(山)

第 81 回 御霊信仰と袋井 9 霊会のはじまり

過去 2 回にわたり、都で始まった御霊会を紹介してきた。袋井の山梨地区は、貞観 5 年(863)5 月 20 日に京の神泉苑で始められた御霊会において祀られた、六所御霊の一つである橘逸勢(たちばなのはやなり)が亡くなった場所とされ、その頃から朝廷の指示で御霊会が行われたのではないかと、考えている。それが形を変え、系譜を引き継ぐのが山名天王社の祇園祭と、山梨に所在する河跡山用福寺で行われている橘逸勢供養祭だ。そこで、山梨祇園祭を紹介するための基礎知識として、京都祇園祭の成立と系譜について説明しておこう。

祇園祭の発祥は、京都神泉苑において貞観 11 年(869)に当時の律令制の国の数である 66 本の鉾を立て、各地の御霊を祀り始め、それが東山山麓に所在する、祇園社(明治以後に八坂神社と名を変える)の祭礼『祇園御霊会』として、疫病の流行した年のみ開催されていたが、円融天皇(970 年)の頃からは毎年 6 月 14 日に行われるようになった。

応仁・文明の乱で都が焼け野原と化して中止されたが、明応 9 年(1500)に町衆によって再興され、26 基の山と鉾が巡行したと伝えられる。現在の山鉾巡行は、前祭・後祭と言い、神輿渡御(とぎょ)と還御(かんぎょ)に合わせて 2 回に行う古式が復活し、計 6 基の鉾が登場する。鉾には屋根の上に長大な真木(しんぎ)が立てられ、これが鉾を立てた名残で、祭神の依り代となるので榊が付けられている。

頂上(鉾頭)には鉾飾りが乗せられ、その内容で長刀鉾・菊水鉾・鶏鉾・月鉾と名前が付いている。地上から鉾頭までは 25 メートルあり、屋根上から鉾頭までの真木の高さは 17 メートルに及ぶ長大なものである。(山)

第 82 回 御霊信仰と袋井 10 御霊会のはじまり

今回からは祇園御霊会の賑わいを演出する山鉦がどのようにしてできたのかを見て行こう。

鎌倉時代末～室町時代初め(650 年～700 年前)頃の、祇園御霊会の出し物の主流は笠鉦(かさほこ)であり、「山鉦」と呼ばれる造り山はまだ登場していなかった。それは袋井市ではおなじみの、お盆の歳時記、「かさんぼこ」のルーツでもある。

9 世紀後半に始まった祇園御霊会は、最初は多数の鉦を立てて神霊の依り代としていたものが、14 世紀代になると見せ物としての笠鉦が加わる。笠鉦とは美しい染織品で装った「風流傘(ふりゅうがさ)」と呼ばれる傘を神霊の依り代としたもので、音楽と舞踊、棒振、といった芸と一揃いになっているのが特徴で、「風流(ふりゅう)」と呼ばれる作り物や芸能のもっとも基本的な形とされる。

現在の京都祇園祭の綾笠鉦は 2 基で構成され、前方を行く 1 基目には御神体とする木彫りの金鶏が、後方に従う 2 基目には松の木と根元に御幣がそれぞれ頂きに飾られる。円形の傘の端には刺繍の施された傘垂がりが付けられ、担ぎ台には華麗な前懸・胴懸(懸装)が飾られている。こうした「風流傘」に造り物が加わった構造のものは「山笠」と呼ばれるようになる。ちなみに「山笠」の史料上の初出は応永 27 年(1420)である。

こののち祇園祭の「山笠」は依り代としての笠鉦の流れを受けながら、造り物(山車)の方に力が注がれ、大型化することにより「山」が成立してゆくのである。(山)

第 83 回 御霊信仰と袋井 11 御霊会のはじまり

今回は前回に引き続き「山」と「山車(だし)」の成立について説明しよう。祭礼に欠かせないものとして、「だし」や「ねり」を挙げる人は多いのではないだろうか。本来、「だし」は無かったが新調したり、中古品を購入し、手を加えて整えた自治会も多い。「だし」はなぜか「山の車」と書く。その理由も「山」の成立に関係している。

「山」は笠鉦型舁山(かさほこがたかきやま)と呼ばれ、台枠に神霊の依り代となる短い真木を立てた四人で担ぐ笠鉦の傘の上に、造り物を乗せる舁山から始まる。これを描いたのが 15 世紀前半の「月次祭礼図模本」で最古の資料である。そこに描かれた造り物は、中国の故事にちなんだ神仙境を表し、山型の上に老松が立ち、そこに供の童子を連れた中国の高士(こうし)林和靖(りんなせい)註)のところへ鶴が挨拶に訪れた情景を作り込んだもので、趣向をこらした「出しもの」であった。

山型は単なる背景でなく、社と一体となる神体山の趣で、神の宿る山とされる。これが江戸初期以降大型化し、車輪の上に乗せる「山」へと発展した。山をかたどった出し物が車輪の付いた台上に造られ、洛中を引き回すので「だしもの」が「だし」に略され、見た目そのものを表す「山車」という漢字を当ててようになったわけだ。(山)

註：高士・・・中国では有能な者が世俗を離れて山林の中に隠れ住み、何者にもとらわれない生き方をする人を尊ぶ風潮があり、そのような人を「高士」と呼んだ。林和靖は宋代の詩人。

第 84 回 御霊信仰と袋井 12 御霊会のはじまり

御霊信仰の仏教行事である御霊会について、祇園社と祇園祭(祇園御霊会)を中心に説明してきた。平安京の祇園社の祭礼において、笠鉾が大型化した笠鉾型舁山(かきやま)がまず成立し、その上の造りもの(出し物)である神体山の山型が巨大化して車輪が付くようになり、これを表現するため「山車」という漢字が宛てられ、読みは出し物を略した「だし」になったという経緯を説明した。

平安京発祥の御霊信仰が全国に広まったものとして、祇園の他に天神信仰を忘れてはならない。これは藤原氏との政争に敗れ、九州大宰府に左遷され、恨みを残して亡くなった菅原道真(845～903年)の怨霊を御霊神として祀ったもので、これを鎮め善神とするために設けられたのが北野の天満宮であった。遠州にも多くの天神社・天満宮が存在するが、これも御霊信仰の産物である。

平安京では稲荷信仰の惣本宮である伏見稲荷社の祭礼も御霊信仰の影響を受けて、早くも平安中期には稲荷御霊会として形を整えている。祭礼では神霊を五基の神輿にそれぞれ一柱ずつ乗せ、稲荷山麓の本社から東寺東の御旅所(おたびしょ)に向かって神霊を渡御(とぎょ)させるもので、現在も毎年5月連休中に「稲荷祭」として行われている。

平安京内唯一の寺院として設けられた東寺を嵯峨天皇から託された真言宗の開祖空海は、稲荷山の神を東寺の鎮守として境内に迎え、その縁から神仏分離が行われる明治初期までは金堂前に神輿が渡御し、真言僧の密教加持を受けていた。このように御霊信仰は多様に展開しているのである。

次回からは、都やその周辺で展開した御霊信仰がどのように遠州に入ってくるのかを説明しよう。
(山)

第 85 回 御霊信仰と袋井 13 遠州への波及 1

都やその周辺で展開した御霊信仰が遠州に入ってくる道筋には大まかであるが御霊系と祇園系、これに天神系を加えた 3 系統に整理することができるようだ。まずは、天神系について説明しよう。

天神で御霊というと、学問の神様で知られる菅原道真のことである。道真は藤原氏の陰謀によって福岡県大宰府に左遷され、二年後の延喜 3 年(903)に死去し同地(現大宰府天満宮)で葬られたが、その後、京の都で異変が相次いで起こる。

延喜 9 年(909)に道真の政敵であった藤原時平が 39 歳の若さで病死、延喜 13 年(1573)には道真の後任の右大臣源光が死去。延喜 23 年(923)には醍醐天皇の皇子で東宮の保明親王(時平の甥)が、次いで延長 3 年(925)その息子で皇太孫となった慶頼王(時平の外孫)が相次いで病死。極めつけは延長 8 年(930)朝議中の清涼殿が落雷を受け、道真の左遷に関与したとされる大納言藤原清貫をはじめ、朝廷要人に多くの死傷者が出たことだ。このショックで醍醐天皇は病に倒れ、皇太子寛明親王(ゆたあきらしんのう：後の朱雀天皇)に譲位したが 1 週間後に亡くなる。

この頃は都で洪水・大風・疱瘡などの自然災害や疾病も頻繁に起こっている。これら一連の凶事は道真の怨霊が起こしたものだとして朝廷は考えた。そこで延喜 23 年(923)に道真を従二位大宰権帥から右大臣に復し、正二位を贈ったのを初めとして、正暦 4 年(993)には贈正一位左大臣、同年贈太政大臣とし、翌年「大天満自在天」という神格を授与して、もともと火雷天神が祭られていた京都の北野に、道真の祟りを鎮めるために北野天満宮を建立すると同時に、諸国に道真の御霊を祀るよう命じた。こうして国衙が置かれた見付の鬼門の方角に所在する矢奈比売神社に天神の御霊が合祀された。(山)

第 86 回 御霊信仰と袋井 14 遠州への波及 2

都やその周辺で展開した御霊信仰が遠州に入ってくる道筋の二番目として、祇園の系統について説明しよう。袋井市内で祀られている御霊信仰のほとんどの神社が、この「祇園」と呼ばれるものだ。

市内に所在する祇園系の神社は、本社である平安京の祇園社感神院(ぎおんしゃかんしんいん/現在の八坂神社)から勧請(かんじょう/神霊を分祀すること)したものと、尾張国(現在の愛知県)津嶋牛頭天王社(つしまごずてんのうしゃ/津嶋社と略す)から勧請したものとの2系統がある。

市内には「天王さん・津嶋さん」と呼ばれる神社や境内社、祠が各村に多数所在しているが、その本社がこの津嶋社であることを知る人は少ないだろう。七月に盛大に行われる山梨天王祭の山名天王神社は平安京の祇園感神院の系統で、津嶋社系とは異なり、その数は少ない。

津嶋社が所在する津嶋の地は広大な濃尾平野を形成した木曾三川(きそさんせん/木曾川・長良川・揖斐川)が合流する平野の末端で、伊勢湾に注ぎ込む直前にあたり、幾筋もの支流が入り組んで川と海との接点をなしており、津嶋港は水上交通の要所であった。

尾張国を統一した織田氏は津嶋社を氏神として崇敬し、境内の堂社造営に尽力すると共に、門前町では楽市楽座を行い、港の整備を進めるなど経済振興を図ったことから、津嶋港は熱田社のある熱田港とともに、戦国大名織田氏の財政を支えたわけである。

天下統一を果たした豊臣秀吉は信長の意志を引き継ぎ、津嶋社を保護したので益々発展することになる。津嶋社は伊勢神宮にならって津嶋御師(つしまおし)と呼ばれる、布教者を多数抱えて東海地方から関東地方にかけて活動させたので、江戸時代初期には津嶋社の神霊を勧請した社や祠が各村に多数設けられるようになる。こうして、袋井市内に多数の津嶋社が成立したわけだ。(山)

第 87 回 御霊信仰と袋井 15 遠州への波及 3

都やその周辺で展開した御霊信仰が遠州に入ってくる道筋の最後として御霊系を紹介しよう。袋井市に関係するのが三筆の一人として歴史に名を残す橘逸勢(たちばなのはやなり)の御霊だ。逸勢は延暦 23 年(804 年)に最澄・空海らと共に遣唐使として唐に渡って書を学び、大同元年(806 年)の帰国後はその第一人者となった。

承和 7 年(840 年)に但馬権守に任ぜられたのを最後に出仕せず静かに暮らしていたが、承和 9 年(842 年)に嵯峨上皇が没すると、その 2 日後の 7 月 17 日に皇太子・恒貞親王(つねさだしんのう)の東国への移送を画策し、謀反を企てたとの疑いで伴健岑(とものこわみね)とともに捕えられ拷問を受けた。しかし両者共に罪を認めず、7 月 23 日には仁明天皇より両者が謀反人であるとの詔勅が出され、兵によって包囲された。

最終的に、大納言や中納言、参議は免官され、恒貞親王は皇太子を廃され、逸勢は伊豆へ、健岑は隠岐への流罪が決まった(承和の変)。逸勢は護送途中、遠江板築で病没した(60 余歳という)。逸勢の後を追っていた娘は板築駅まできたときに父の死を知り悲歎にくれる。娘はその地に父を埋葬し、尼となり名を妙冲と改め、墓の近くに草庵を営み、菩提を弔い続けた。

死後、逸勢は罪を許され、嘉祥 3 年(850 年)に正五位下の位階を贈られ、娘の孝行話は都に伝わり賞賛され、仁寿 3 年(853 年)には従四位下が贈位された。

無実の罪で死亡した逸勢は怨霊となったと恐れられ、貞観 5 年(863 年)に行われた朝廷主宰の御霊会では御霊神の一つに加えられ、現在も京都市の上御霊神社と下御霊神社で「八所御霊」の一柱として祀られている。

逸勢が没した板築駅は市内山梨に所在したと伝え、鎌倉時代後期のものではあるが、その供養塔が用福寺境内に存在する。(山)

第 88 回 御霊信仰と袋井 16 遠州への波及 4

袋井市内で最も賑やかに祇園の祭礼を行うのが山名の天王祭だ。今年も山梨の山名神社(明治以前は「山名天王社」と言った)から太田川沿いに所在する御旅所(おたびしょ)である、若宮八幡宮まで祭神の神霊を移した神輿の渡御(とぎょ)が行われる予定だ。

祭礼時に祭神ゆかりの場所に神霊を乗せた神輿が渡御し、一夜から数日間留まる仮宮のことを御旅所という。ここに八幡の若宮(御子神)が祀られるようになったのは明治初期のことで、それ以前は「御旅所」とのみ呼ばれていた。

この地は、太田川上流から流れてきた神霊が漂着したゆかりの土地で、山梨で天王社が最初に祀られたところだと伝える。しかし、太田川の流路は時代と共に変化し、これに併せて御旅所の位置も幾度となく動いて、現在の地に落ち着いた。

御旅所のすぐ横の太田川には板築橋(いたつきばし)という橋が架けられているが、現在地に設置されたのは県道の付け替えに伴う昭和 52 年のことで、旧板築橋は 100 メートル近く上流に架けられていた。

古くは渡船であったものが、明治初期に板架けの潜り橋が設けられ、明治 12 年に地元の幡鎌亀吉という人が高橋を架けて、「板築橋」と名付けたという。その由来は謀反の疑いをかけられた橘逸勢が伊豆へ護送される途中、遠江板築駅で病没するが、逸勢の供養塔(鎌倉後期の五輪塔)が山梨で祀られていることから、山梨こそ板築駅にちがいないと考えたからだ。

六国史の一つ『日本文徳天皇実録』には逸勢の後を追って都から下ってきた娘が板築の地に父を埋葬し、尼となり名を妙沖と改め、墓の近くに草庵を営み、菩提を弔ったと記しており、その場所が御旅所だと地元では伝えている。御旅所に年に一度里帰りする山名天王社のご祭神とは、御霊となった橘逸勢というわけだ。(山)

第 89 回 御霊信仰と袋井 17 祇園の杉の祠 1

梅雨が明け、暑い夏が訪れる直前の 7 月第二週の土日には、各集落で祇園に代表される御霊会の神事や祭礼がくり広げられる。

8 月は穀霊となった先祖霊が子孫の元に戻ってくる盆月であることから、仏壇や盆棚には、だいたい 6 月じゅうに収穫できる麦を加工したうどんや素麺が先祖霊の恵みとして供えられるわけだ。

この盆月を迎える前に、厄や災害の元凶と考えられた様々な御霊をもてなし、村内や街中を浄めておこうというのが祇園を代表とする御霊会である。

市内の遠州灘に面した旧幸浦地区に、東同笠・西同笠という集落がある。さて、この集落名「同笠」を皆さんは読めるだろうか?答えは「どうり」である。残念ながら地名の起源は伝わっておらず、「通り」の転化とされるものの、由来は不明である。このうち西同笠の鎮守、寄木神社境内には、毎年、祇園の祭として「津島様」と呼ばれる杉の祠を朝から作り替え、夜になると提灯をともにして囃子を奏でる夜祭りが行われている。

祠の構造は、波打ち際の清らかな海砂を運び込んで方形の土台を作る。その上に四本の竹を柱として立て、竹を割った棒状の部材を井桁状に組んだ壁と屋根を設けて骨組みが完成する。この骨組みに青々とした杉の葉を隙間が無いように挿し、鋏で刈り込んで形を整えると、中心に新しい津島神の御札を入れて完成となる。

このような常緑樹で覆った仮設の祠を「オカリヤ（御仮屋）」と呼んでいる。西同笠は旧原野谷川流域の集落の一つで、隣接する太郎助集落でも、昭和 60 年頃まで杉で覆われた「オカリヤ」を作り、祇園の祭礼を行っていたが、現在は木造の祠となった。杉の葉で作る「祇園のオカリヤ」は近隣でも数カ所残っているので、しばらくはそれを探訪してみよう。(山)

第 90 回 御霊信仰と袋井 18 祇園の杉の祠 2

先月号では市内西同笠地区の寄木神社境内で祇園の祭礼に伴い、毎年作り替えられる「祇園のオカリヤ(御仮屋)」を紹介した。現在、袋井市内でおこなわれているのは、この一例だけとなってしまったが、隣接する太郎助地区でも昭和 60 年頃まで、同じように「祇園のオカリヤ」を毎年作り替え、祭礼をとりおこなっていた。

ここで少し、太郎助の歴史を紐解いてみよう。幕末の横須賀藩校の教授を勤めた八木義穂がまとめた地誌『郷里雑記(ごうりざっき)』には川上太郎助という人が、西浅羽地区の西ヶ崎村からやってきて開発したこと、村名となったという言い伝えを記している。

もとは「なぐり」と呼ばれる場所で、集落の北側一帯には大きな湿地帯があり、これを永禄年間(1558 年～1570 年)に戦国大名の今川義元・氏真が大規模な治水事業と排水用の運河の掘削、そして新田開発を進め浅羽低地一体を開発したところから始まる。

「なぐり」とは湿地の名残(なごり)という意味で、その中にある島状微高地の真ん中を突き抜けるよう湊(用水路)を掘り抜き、新在家とよばれる用水路に面した河川交通の新湊を拓いたことから始まる。湊はのちに江川や前川と呼ばれ、これに面して村の鎮守も新しく迎えた。それが現在の神明神社ということだ。その境内で毎年、新竹の柱に杉の青葉を挿して屋根がけをしたオカリヤを作り、祇園の川祭を 400 年以上おこなっていたわけである。

昭和 60 年頃、篤志家により立派な津島社の祠が寄附されたので、オカリヤを作る祭礼は無くなった。平成 3 年 11 月に郷土資料館を開館するにあたり、太郎助の杉の祠を形として残したいという計画を氏子総代に相談したところ、長年作ってきた人たちが喜んで協力してくれた。お陰で展示用の杉のオカリヤを現地、太郎助の神明神社境内で数年ぶりに作るようになった。展示用なので先に方形木枠を作り、その上に組み上げた特注品であった。完成すると軽トラックで資料館に運ばれ、西同笠の杉のオカリヤと二つ並んでお披露目した。この二つのオカリヤは今も資料館に並んでいる。(山)

第 91 回 御霊信仰と袋井 19 祇園の杉の祠 3

袋井市域で今も毎年作り替えられる杉の祠、「オカリヤ」は西同笠の一ヶ所だけとなってしまったが、磐田市域では 3 ヶ所で今も作り替えて祇園の祭事を行っているの、それを順次紹介していこう。

一ヶ所目が太田川・原野谷に架かる二瀬橋を渡った最初の集落、新出の春日神社境内、二ヶ所目がその北側の集落、東脇の十二社神社境内だ。江戸時代後期に纏められた地誌『遠淡海地誌』によると「新出村(大名)青山下野守知行小地名上組十五戸、下組三十四戸高三百五拾九石七斗壺升九合…参土神(うぶすながみ)春日大明神八幡大神」「東脇村(旗本)長谷川五兵衛(知行)御代官所十八、九戸高百十六石四斗五升六合…二瀬川渡場所」と記されている。当時は新出村が 50 戸、東脇村が 18、9 戸という小規模な村で、隣り合っているものの、新出村は浜松藩領、東脇村は旗本領と領主が異なっていた。面白いのが江戸時代には太田川・原野谷川には橋が無く、東脇村に川船の渡し場が設けられていたことだ。

現在は二瀬橋の南側で、両河川は合流するが、これは江戸時代初期に流路を付け替えて一つにしたもので、それ以前は決して交わらない二筋の川だった。

かつての太田川・原野谷川は高低差のほとんど無い海岸低地を太田川は西に向かって蛇行して流れ、現在の今之浦川がその名残りだ。原野谷川は海岸砂堤の内側を東に蛇行して流れ、現在の前川がその名残で、末端は東浅羽の江之端周辺に広がる内海に注ぎ込み海には出ていなかったの、度々洪水を繰り返し、湿地や池が多く見られた。

関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は慶長 8 年(1603)に幕府を開くと、翌年遠州総検地を行い、同時に両河川を合流させ流路を付け替える大工事を実施させた。川の西側には御厨大囲堤が築かれ「御厨十七郷」と呼ばれる輪中が成立し、その中の一つとして新出村・東脇村が誕生した。旧太田川に面する両村では、特に川祭である津島牛頭天王社(愛知県津島市)の祭神を祀る、祇園の御霊祭を大切に受け継いできたわけで、両社のオカリヤは角をピンと張った牛頭天王を象っているのが特徴的だ。(山)

第 92 回 御霊信仰と袋井 20 祇園の杉の祠 4

前回は磐田市に残る三ヶ所のオカリヤ(御仮屋)のうち、旧太田川右岸に所在した新出村・東脇村の 2 事例を紹介した。今回は、天竜川左岸の磐田市富里(旧豊田町富里)の事例を紹介しよう。

富里という地名は土地改良事業によって昭和 51 年に成立した新しい地名で大字(おおあざ)匂坂西・匂坂下・気賀東の一部が新たに富里となったものである。

内山真竜の『遠江風土記伝』によると元は匂坂郷という郷村であったが、正保年間(1644～48 年)の頃に六村に分轄して(村切りという)匂坂上村・匂坂中村・匂坂新村・匂坂西村・匂坂中之郷村・匂坂下村がそれぞれ成立したという。

これらのうち旧匂坂西村(匂坂西下組)に祇園の杉の祠「オカリヤ」が伝わっている。匂坂西下組といえ、今は「大めし祭り」と呼んでいるが、かつての修験道行事である「強飯式(ごうはんしき)」という全国的にも希少な伝統行事が継承され、民俗学の世界では名の知られた地区である。

「大めし祭り」というのは正月行事(当たり日は 1 月 11 日)で、新しく迎えた嫁を接待し、お椀に山盛りの御飯を食べさせるもので、一種の通過儀礼であった。なぜこのような、修験道行事が継承されているかということ、匂坂周辺は気賀組という山伏や陰陽師集団が地域の治水や用水の掘削に関わる神事を行い、末裔が分散して居住したことから、その儀礼が民衆の間に継承された珍しい事例なのである。

村の鎮守である諏訪神社の境内では、七月中旬の日曜日に、今も祇園の行事としてオカリヤを作っている。その内容は、朝から新竹と杉の葉で作し、完成すると本殿前に設置し、津島神社の御札を祀って提灯を飾り、御神酒を供えて、参加者が順番に参拝して終わるというものである。現在は、境内の林の中に捨てられ朽ちるのを待つが、本来は祭礼終了後、天竜川に運び、村内の厄と共に流していた。(山)

第 93 回 御霊信仰と袋井 21 祇園の杉の祠 5

ここまで市内浅羽地区、西同笠寄木神社境内の津島の杉の祠、オカリヤ(御仮屋)から始めて、地域に伝わる祇園の祭礼を順次紹介してきた。最後に天竜川右岸の事例として、浜松市南区下飯田町を紹介しよう。

下飯田町は浜松市の東部にあり、集落の東側に安間川(旧天竜川)が流れ、さらに東側には天竜川の本流が流れている。旧長上郡に属し北から上飯田村・下飯田村・金折村と並んでいる。

下飯田町の祇園のオカリヤは六所神社拝殿で8月第一か第二土曜日に長老達が集まって杉の葉で神輿を作る。できあがると津島神社の御札をその中に納め、神事を行う。その形は、両側にピンと角を立てたもので、磐田市の新出・東脇のものに類似しているが、神輿仕立てにしたものは初めてであった。

オカリヤの神輿は割竹に杉の葉を挟んで組み立て、二本の担ぎ棒の上に載せる。大きさは横幅が50センチ角で高さ約60センチ、屋根の棟の両端が約90センチあり、角のように反り上がっている。新しくできた神輿は一年間神社内に祀っておいた古い神輿の前に並べ置かれ、神饌物を上げてお祓いが行われる。

翌日、新しい神輿を外に出し、子ども達はこれを担いで拝殿と境内入口の鳥居の間をぐるぐると数周廻ってお披露目が行われる。(山)

第 94 回 御霊信仰と袋井 22 杉の持つ霊力

ここまで5回にわたり、杉の青々とした葉を挿した祇園の祠、「オカリヤ(御仮屋)」を紹介した。これらは、いずれも愛知県津島市に所在する、津島神社(津島牛頭天王：つしまごづてんのう)の神霊を迎え、祀る依り代である。

その形は多様で、屋根を持つ祠型で柱がある構造、柱は無く直置きのものから、牛の角を表現したもの、神輿型のものと、実にさまざまで、同様のものは愛知県や岐阜県にも分布している。

形は変化に富むものの、総てに共通するのが、全面に杉の葉を挿していることだ。今回は杉の持つ霊力について紹介しよう。

普段、何気なく使っている漢字には落とし穴がたくさんある。それは、音だけで表現する日本語(大和ことばとでも、呼んでおこう)を中国の文字である漢字に当てはめることにより、本来の言霊(ことだま)の意味が失われているからだ。「杉」は大和ことばでは「直木(す・ぎ)」という漢字を当てはめると、本来の意味がわかる。

天に向かってまっすぐに延びる杉の木は、神霊が宿り、降下する特殊な木という認識があった。そこで、杉だけを植えて聖域の森を形成することも全国で知られている。聖域の入口に2本の杉を植えて、その間から出入りする結界(けっかい：聖域の境)とし、これに横木を渡して固定すると神霊を運ぶ鳥が居着く「鳥居」となる。

青々とした葉は乾燥させて線香を作る。生木は地面に巣のように敷くと修験者の山中での寝床となり、枯れ枝を集めて燃やすと虫除けとなり、山中修行には欠かすことができない霊木であった。

このように杉の木は依り代となり、葉は実用であると同時に、トゲトゲした形状が、魔物を追い払い、寄せ付けない能力があると考えられたので、杉のオカリヤのようなものが作られたわけだ。
(山)

第 95 回 御霊信仰と袋井 23 津島信仰の拠点 1

神社や寺院は本来、何のために存在するのか、考えたことがあるだろうか。我々は観光でいろんな場所に行き、その寺社を訪れる機会も多いはずだ。拝観寺院では文化財に指定された建築や庭園、仏像、襖絵、寺宝等を鑑賞し、歴史の重みを直に感じ満足して帰る。

これに対し殆どの神社は、これといって、特に鑑賞するものがなく、参拝を済ませると、帰ってしまう。確かに普段は殺風景な空間かもしれないが、神を祀る祭礼や神事を行う時には一変し、賑わいと熱気で満ちあふれた特別な空間となる。「やしろ」(屋代)は社会の「社」という漢語を充てたように、人々が集い社会を形成する特別のハレの空間だ。もちろん、寺院の仏堂も法会(ほうえ)と呼ばれる仏事を執り行う空間で、我々はその抜け殻を鑑賞しているに過ぎないわけだ。

89 回から 93 回にかけての 5 回にわたり、遠州の海岸低地で続けられている杉の葉で作った「オカリヤ(御仮屋)」を紹介したが、これらはいずれも「津島さま」と呼ばれている。その本社は濃尾平野の海岸低地に所在する「津島牛頭天王社(つしまごづてんのうしゃ)」で明治以降は津島神社(愛知県津島市)と呼んでいる。

これについては、86 回に紹介したが、江戸時代になると「津島御師(つしまおし)」と呼ばれる宗教者が各地を廻って津島牛頭天王の功德を宣伝し布教したことから、遠州の河川流域の各村では「津島講」と呼ばれる講が組織され、御師による配札が行われた。各村では祇園の祭礼の日に杉の御仮屋を設け、中にこの御札を祀って村中の厄を集める祭礼を夜通し行い、翌朝、御仮屋を川に流して村内を浄化した。津島神の神事は川祭を行うところに特徴があるわけだ。(山)

第 96 回 御霊信仰と袋井 24 津島信仰の拠点 2

遠州の祇園(牛頭天王)信仰は愛知県津島神社(津島牛頭天王)の影響が大きく、津島御師が熱心に布教に訪れたことから各村では「津島講」が結成され、毎月 15 日に「津島牛頭天王」と神名が書かれた軸を掲げて講員が祭礼を行うところもあった。

本社の愛知津島神社の祭礼に代参者を出し、神札をいただいて村での天王祭を行う事例もあった。第 89 回目に紹介した西同笠(にしどうり)村がその一つで、「戦後もしばらくは、毎年、出かけて檀家の契約をした御師の宿坊に泊まって接待を受け、二日にわたる祭礼を見物したのち、御札を授かり持ち帰った」という話を古老から直接聞き取りしたことがある。

この祭礼は宮島の「管弦祭」、大阪の「住吉祭」と共に日本三大川祭と呼ばれるほど、盛大に繰り広げられるもので、近世には歴代の尾張藩主も度々訪れた。かつては旧暦 6 月 14・15 日に行われていたが、現在は 7 月第四土・日曜日に行われている。

京都の祇園祭では山鉦の巡行が行われるが、津島天王祭では津島が伊勢と尾張を繋ぐ湊町であったことから川に船を浮かべてこれを行うわけだ。土曜の宵祭りでは午後七時頃から五隻のまき藁船の提灯に明かりが一つ一つ灯され、九時頃になると囃子方が「津島笛」を奏でながら一斉に漕ぎ出して御旅所に向かう。

翌朝は装いを替え、提灯を外して二段屋台を乗せた車楽船(だんじりぶね)という姿に変身して朝祭りが行われ、見る者を楽しませてくれる。

地域に伝わる伝統や風習は祇園祭ひとつを取り上げてみても、長い年月の積み重ねと、人々の交流が背景に存在している。しかし、その繋がりを知る人は殆どいなくなってしまった。袋井のあゆみを記し伝えることは今を生きる者の大切な役割だと思う。(完)